

麻 生 路 郎 主 宰



十 一 月 號

Pensoj flugas trans la land-limon



川柳雑誌・十二月號目次

表紙 (路郎主幹の題字).....

川柳陣營の言葉..... (一)

武玉川研究 (二三)..... 梅本 鹿山 (六)

語源 覺書 (完)..... 浅田 一 (一〇〇)

句作 品 二 三..... 路郎・五健 (二)

陣 中 川 柳..... 山雨樓・興樂 (三)

寸 感..... 雨 音 美 (三)

若き日の歌をたづねて..... 不死 鳥 (三)

北支征破回顧断片..... 高尾 亮雄 (二)

大原から鞍馬へ..... 加川 泉泡 (三)

香・水・潮・紫..... (四)

不朽洞句抄..... 麻生 路郎 (一)

近 作 柳 樽..... 麻生路郎選 (八)

川 柳 塔..... 麻生路郎選 (四)

一路集 月 當 番..... 石井白面人選 (四)

神 經 供..... 黒川 紫香選 (四)

市場没食子選..... (五)

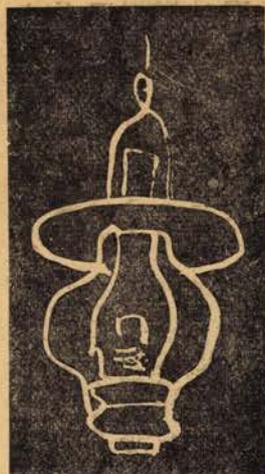
各地 柳 壇..... (七)

川協・柳界展望..... (二〇) 廻轉椅子..... (六)

社關係の人々..... (表四)

抄句洞朽不

— 郎路生麻 —



の營陣柳川

葉言

層一層氣魄ある句を創れ
内に敵愾心を燃えあがらしめよ
外に米英打倒必殺の句たらしめよ
戦ひは今や決戦的段階に入る
爾の句を赤き血をもつて彩れ

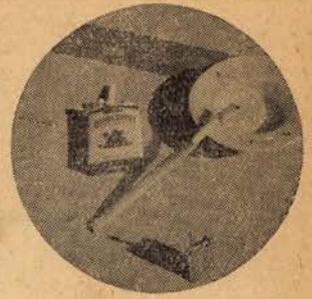
翻へる袖はなくとも美し

お見外れをされて戦闘帽を脱ぎ

學鷺へ父まだ若く母強し

造船にここも覺悟の人柱

空襲必至疎散の祖父母國へ發ち



句評

作品一三

麻生路郎 前田五健 福田山雨樓 西田艸樂

營業用のキリギリスが鳴いて居る長屋 (幽王)

艸樂 狭い籠の中に入れられても野にゐる時のやうに鳴くやがて賣られて行くことなどにも頓着せずに鳴いてゐるキリギリスは暢氣者、だから蟻に笑はれる。句の重點は長屋にあるが、キリギリスが面白。

山雨樓 この句はありのままの現實を只あるが儘に露出したに過ぎない。しかも何等の批判を加へやうともしてゐない、その態度はいゝ。叙法も極めて無造作である。その荒つぽさから来る痛快味があるのでよく玩味して見ると、此處に面白味を見付けたと云ふ作者の顔が浮び上つて来るやうだ。その觀點のあまり高くない事に稍失望した。因にこの位の破調は時に許されてもいゝが上五は何としても生硬

五健 風流であり自然に風流を感じさせる長屋……梅が咲いて何やらの小屋も覗かれると云ふ俳句があつた様ですがそれとは別に川柳なればこそ營業用と、のつげに持つて行つた面白さがあります。生硬が反つて情趣を全體に貫流させるのでないでせうか。いろいろ、代るべき上五を考へて見ましたが私には出来ないで、これでイ、これでイ、のだと思ひました。

字餘り必ずしも破調ではない。上七・中六・下八の三齣に區切つて誦唱すれば、この句は五・七・五調の延長であつて破調ではない。しかし私はそう云つた五七五調に囚はれないで、私の主張する句意による齣の區切り方によつてこの句を十三・八音字型の句として見たのである。即ち「營業用のキリギリスが」までを一齣と見、「鳴いてゐる長屋」を一齣と見るのであつて、それを「營業用の」で切り、「キリギリスが」で切る區切り方は無意味で徒らに句意を弱め、句の力を或は味を散漫にしてしまひはせぬかと云うのである。序でに申上けるが「營業用の」は上五でなく、音字数は七音である。一寸不用意な言だと思ふ。それから營業用といふ文字が生硬であるといふ非難も當らな

い。五健氏の云はれるやうに寧ろ生硬であることが、この句を生かしてゐると云へやう艸樂 川柳なればこそ「營業用の」が面白いのだと思ふ。五健 調齣……成程……つまり型調を破つて型調に入るこ

賣上げを一寸のぞいて出る主人 (好郎)

艸樂 昔藥局をしてゐた時よくこんなことがあつた。歸つてからも先づ賣上を覗いてから店に座つたものである。山雨樓 川柳は軽味を尙ぶ。軽味は川柳の本質を代表する重要な一面でもある。軽いと云ふことはいつさりしてわだかまりのないことであり軽妙な面白味を持つことである。茶漬のやうな味である。日常茶飯事は斯くして多くの川柳の中核をなしてゐる。

この句も亦軽味以上には出てゐない。がこの句を裏返して見ると人間の心理と慣性を見透してゐる點に氣付く。五健 洗ひあげた純木綿の感です。輕妙は一步過ぎると俗悪になるが、この句にはそれが綺麗に逸脱されて居る。然しあまり深い裝はない。その譯を自問自答……つまり考へて見ますと「賣上げを覗く」が統制、配給、組合なんて云

ふ時代の空氣が私の頭にあるからの故と思はれます。路郎 同感である。私たちの頭が既に變つてゐるので、自由經濟時代の小賣商人の一習性を軽く穿つてゐると云ふ面白さに過ぎない。尤もまだぞうした残滓があるとは、思はれないこともないが。艸樂 先日旅先で物を買つたが、夜店を閉めて寝てゐたの

化體症に アルバジル錠 20錠 50錠 100錠

にわざ／＼起きてくれたり他の物まで出して來たりした。矢張り店を出してゐる以上賣上げのよいのが結構なんだ。五健 川柳には特殊な個性が表はれる時と普遍的な人間性

が現はれる時とありますが、この句は、ある時代、今も残つて居るある小さい、そしてなつかしい様な頃を振り返へさせてくれる、モノがある。そのモノがこの句のよきでせう。

愛などと口には出さず尉と姥 (寒浪)

艸樂「口には出さず」は心に通ふ愛を現はすに十分である。謡曲高砂は「山川萬里を隔つれども、互に通ふ心遣ひの、妹背の道は遠からず」とこれはツレの姥が言つてゐる。夫を第一線に出征させた妻の心が特にかうありたい。山雨榎「志賀直哉の名作「暗夜行路」の中に夫婦道を示唆した有名な言葉がある。つまり夫婦が年をとるに従つてその道を明るくする爲めに、何本もの蠟燭をともし替へねばならぬと云ふのである。誠に味はふべき言葉である。

この句は斯うした人生味を湛へてをり、且つ僅か乍ら前述のやうな含蓄をこめてはゐるが、川柳がもつ緊迫力を強く表はすには至つてゐない。有體に云へば常識的觀察に過ぎない。

然るに再誦してほのかに面白味を覺ゆるのは、眞面目な

句に拘はらず上五、下五の描寫の對照から來るおかしさにあるのであらう。

五健「格別申す事もありません。ただ何んだか我々の現生活に遠い所にこの句はある様に思はれます。

路郎「難を云へば、何んとな説明的な口吻であることである。内容には確かに味がある。作者はもつと字辭に就て三思する必要がある。

艸樂「私は始めから作者が國粹的などころを主調したので探つた。口に愛を唱へて實は輕薄な西洋かぶれを攻撃してゐるのだ。時代放れの尉と姥を持つて來て「口には出さず」

で深い意味を含ませた點を買つたのである。現下の日本文壇がかういふ古い題材下に新らしく日本精神を高調しやうとしてゐると同様で、現日本の川柳として此の句のやうなのがあつていいと思ふ。

五健「私の云ふ現生活に遠い感じと云ふのは……まあ笑はないで下さい……虚實の境地から出たこの句に輕味（私は加留味とも稱し深さ或は枯淡と考へて居ます）お可笑味（私は潤ひ或は情）皮肉（私は威嚴）この分量がこの句からあまり感得出來なかつたためでありすが皆さんのお説を

聞いて居る内に、うなづくものがありました。

虫、ヒヨコ、天王寺さん (梨里)

艸樂「虫」は鳴く虫を賣つてゐるのだらう。では初秋です。或は夏かも知れぬ。と俳人では「のどか」に少し文句が出さうだが……實際の情景である。

山雨榎「極度に省略した叙法に快い響きがある。稚拙の句であるが何處か捨て難い。

五健「この「のどか」は季題

★陣中川柳

臨終の馬に

言葉が

雨音美作 辛二郎畫

軍馬、軍夫、軍場の聖戦への協力に一掬の涙を澁ぐものは私だけではあるまい。安らかに眠れ。合掌。(路)



季感などの「のどか」とは別で生活線と比べての「のどか」で一層大きく深い「のどか」でせう。情景の冗漫を短律で引緊め環境が次々に浮いて來て、プラスするものが多い。繪で云ふ餘白の想映で戴ける面白い句です。

路郎「のどか」と云へば春と云ふやうな極限された俳句の季題とは勿論違ふ。「のどか」といふ語が持つ感じは決して固定された感じでは無い。秋の月と云へば悲しいと

云つた風な感じ方が、月並俳句を作り出すことは、俳人も知つてゐる筈である。

艸樂「さうだ。俳句の「のどかさや」なんてのとも同視すべきでなく、季題などに拘泥する必要はない。事實を事實とするところに生命がある。が今尙ほ徒らに歳事記を振り廻す俳人が多いのでちよつと觸れたまでである。

五健「俳句研究十月號に「惱みなき桎梏」を道部臥牛氏が載せて居るが……まあその邊の消息を吐露したものでせう。



川柳塔 路郎選

横濱 福田 山雨樓

赤ん坊も戦つてゐる薄着
大いなる朝なり赤ん坊を抱く
尻もちに屈す色なき赤ん坊

大阪 西 八 歩

血の濃さ神代以來の隣組
蟬を聞くゆとり餘震の中に出来

大阪府 戸 田 孤 篋

煙だけ見れば火葬場とは見えす
工人は裸、お守りぶらさけて
報國隊撃ちてしやまん鉄肝胝

兵庫縣 戸 倉 普 天

燈火親めば隣のラジオ浪花節
何事ぞ此満員にリユクサツク

尼崎 水 谷 鮎 美

人だかり手品の種がよく賣れる
街角で肩をたゞいた歸還兵
強風となつてモンベがよく似合ひ

★

大阪 野 元 吐 空

小使の部屋に明治の時計鳴り

雛鷺の母校へ便り漫書て來
小使の一人鹿兒島産と言ふ

川口 伊古田 伊太古

芝居みな時局を訓ふ役を持ち
故郷に病み父の恩母の恩

川柳 忌

マライから猷句が届く龍寶寺

大阪 木 下 幽 王

秋の花その弱々しさがいやなのよ
かけひきを覚え支那の兒世辭を云ひ

激怒々々地球が逆に廻つてる
天秤棒俺の背だよ食ひ込むな

啄木のうたへる砂にサツマイモ
焚火してどこやら禪僧めいてゐる

尊からずや泥まみれの兵の足
肉體的労働に耐ゆ我が體力を誇る

此の電話相手はビルの八階か

應接間猫へ鬱憤晴らしとき

はる、なつ、あき、ふゆ、變らぬものに古疊
捨てられた猫に輝くお月様

バドリオ政權の醜態

イタリヤがビールの泡へ浮んでき

たべ物も趣味も似てきて世帯馴れ

沈黙は金だくと云ひ聞かせ

蝙蝠の茶碗まだまだ生むつもり

坊さんが育児の本を讀んで居る

一寸したことが嬉しい義母なりき

西宮 加 川 泉 泡

新 京 水 谷 琴 水

大阪府 西 野 一 望

うつちやりの見事きまつたキスカ島
箸おいて富士はやつぱり日本一

英靈へかよわき我身振りかへる
鶏よ増産日本を知つてるか

産み月へモンベのひもが伸び切つて
三十の坂初産の派手なこと

婦人部長モンベの色が一寸派手
兩親の腫に頼母しい少年工

黙禱へ昔の子供も肅となり
やがて征く蓖麻だ嵐よそれて行け
ガ島惚べば一粒もこぼされず
空の子も海の子もゐる子澤山

肺患の目にたくましい漁夫の腕
特配へ見事報うた呱呱の聲
子を叱る隣を妻に聞かせとく
受付で燐寸を借りる會葬者

派出所で小さい溝まで教へられ
賣場だけ教へ嘯く女店員
それごらん案山子も戦鬪帽で起つ
その中で戦車の菓子がいつち好き
神鹿の糞よけて芝生に子と坐り

次男出生

お隣の妊婦も來てる産見舞
雛鷺に隣のほんもなりました
吊皮を持たせとねだる男の子
イタリヤをごらんさいと勵み合ひ
もう二貫肥りましたと軍事便

大阪府 宮 岡 白 峯

一億の視線 集めてゐた俺か
防空壕の智慧迄借りられる
ハイキング此處にも女來てるなり

松本 石曾根 民 郎

微恙三句

藥得ていくさまなかのわれを恥づ
子規全集重ね病むこゝろ足る眞晝
病む虫を撃ち破る日々わが戦記

大阪 正 本 水 客

ひがん花ベスの埃りをよけた色
曼珠沙華少さき工場に水車廻れり
退避壕ヒーヤリとして秋も無事
新兵の後姿がほゝえまし
馳足のヒョイ馬糞よけてゆく
尺八は凭れるとこの要る姿

大阪 丸 尾 潮 花

敵前へ迫る氣魄の鋏をうち
君嫁に來ないか僕は無産だが
ひと房の葡萄の如く長女ゐる
子の描いた旗で驛まで見送られ
田も畑も晴れた嫁御もついて來い

大阪 北 川 春 巢

百姓を羨めば食べてるだけと云ふ
土曜の夜灯つた役所見て通り

大阪尾崎方正

オツチヨコチヨイ脚の運びに讀まれたり
降る前の雲に似てゐるとり亂し
撤收後敵が墓穴を掘るキスカ

大阪 中 原 銃 人

藝奴さへ君献金をしたんだぜ
時間的貧乏でネーと無性ひけ

下関 多 田 市 多 樓

時雨する中を勤勞隊の列
モンベにも改革があり縫ひなほす
うちの子も今年征く年二十一

今治 月 原 宵 明

秋さなか驛長室にあるすゝき
肩車頭叩かれ虹がみえ
赤紙も白紙も來る若さなり
燒場迄點々とある曼珠沙華

長男健康

あつちでもこちらでも抱かれ健康兒

大牟田 高 田 抱 逸

研ぎ汁を捨てても注水型になり
注水競技男勝りの妻の顔
社の桁と餘りに違ふ貯金局
電髪の下火になつて國強し
生ビール九人抱へて振り向かず

下関 國 弘 半 休

弟よつゞけと秋空飛んで見せ
社長さて仕事場へ出る音をさせ
忠魂碑村一番のものになり

尾崎 小 林 文 月

入學の様に我子は友と征き
征きし兄の机弟が占領し

西宮谷口綠葉

修繕の靴をかゝえて乗つてくる
日曜が分らなくなる床に臥し

大阪 武 部 香 林

庇ひ合ふ氣持が嬉し隣組
南洋へ陶像となる氣で出掛け
大陸に虹があるかと娘の手紙

布施 上 田 翠 光

九月十日長女出生(五句)
僕の子が一億突破して生れ
父と云ふ自覺が出社急がせる
産褥へ退社の足はまつしぐら
菊活けて虫も育てゝ子供好き
おゝ泣いた泣いたと抱いて叱られる

京都 明 石 柳 次

日曜の朝古釘を伸ばす用
ダイヤみな狂はした空星光る
たもと短したゝかふ國の母として
先生と同じ風呂はもう上り
客のあと妻勞つてゐる若さ
姉奉天より歸る

大阪 水 谷 竹 莊

天ぶらになるのも知らず蝦ははね
訓練の女は屋根を怖がらず
修養をつんで言ふ事言はず居る
糠よろにチャーチル葉巻喰ひちぎる

堺 村 上 角 堂

日曜日水槽洗ひ水替へる
子が植えた苧麻へ届かぬ子の背たけ

尾崎 長 谷 川 三 司

武川玉川研究 (二三六)

梅 塵 山
森 東 魚
蛭 子 省 二

五 編 (一八)

(290) 金借し後家の轆まてうつ

省二 金貸しをして後家をたて、ゆく程の女だから、かなり気性も確かなのである。慰みに「自慢的に」轆などうつ。「轆まで」とあるので他の事情を察し得られる。(此句の通りの女性を知つて居る。その後家さんは例のヘナもうつ。相手が坊さん夫婦なのだから、世の中は裏から観ると混沌たるものだ)。

(291) 足跡の丁度揃て大根引

東魚 大根引く踏張つた足あとが同じ様に揃つてつくつと云ふ、寫生的の穿ち味である。
塵山 是れは事實にあるであらう敷。猶且机上で作つた匂らしい。

省二 「丁度揃て」を文字通りとすれば、確に机上作と思はれるが、これで一個の場面を穿ち描いたものとすれば、すみはせぬか。

(292) 身上りも二月二日ハうぬかため

省二 二日灸は効能顯著なりと云ふ。それで花魁が身揚りをしてする。身揚りとは自ら玉代を拂ひ見世を休む事。大抵は馴染客のためにするのであるが、二日灸のは自身のためだと云ふ丈で、内容も乏し。花魁などは職域柄、體をかばはねばならぬので、殆んど灸は据えたやうである。

(293) 今年も尖まてる七夕

省二 七夕用の竹などを用意する爲に。「今年も」は一寸理屈らしいが、今年も嬉しい感じを含ませたい

の。
東魚 お七吉三のやうな、前年の情景が聯想される。「今年も」は其穿ちであり、その挿揄であり、「たてたいであらう」と云ふ心持ちである。

塵山 自分には、お七吉三の情景のやうなことは聯想されない。平凡の句と思はれる。

(294) なひかねハ火燧も寒い道具也

省二 箱入りを口説きはじめは亥の日也、などの如くであるが、相手が相手にならねば、炬燵は物足らぬ寒い道具にすぎぬ。徒らに心許りを燃しても。

東魚 「寒い」は満されぬ心持ちである。

塵山 相手の心の冷炬燵りもいふべき敷。

(295) 笙の遠音に天井を見る

省二 按摩の笛が、かすかに聞えても、天井をみつゝ、其音に耳をそばだてるものだ。まして笙では一としほだ。

東魚 何處とも知れず笙の音がするので、天井を見上げるやうに、聞きますます趣。

塵山 天人が繪描いてある。寺院の天井などを、見上るのであらう。

(296) 遠退て一柄杓ツ、口を出し

省二 數人の者が柄杓から水を振舞つて貰ふ。こぼれて足にかゝらぬ様に、一寸後退りして。夏日暑さに惱む人の爲に、柄杓を添えて水瓶が出してある家があつた。「一柄杓ツ」とある點には、尙ほ考へる餘地があるかに想ふが。

東魚 更りあつて、水を飲むさまが、よく描出されてゐる。

塵山 神社佛閣等にて、水屋の者が參詣人に酌むで出す水を、一柄杓づゝ漱ぐのである。

(297) 檢久かつふる前に文枕

省二 檢久は松山に馴染み豪遊の後發狂す。「文枕」とは枕の下に手紙を入れ置く事から、手紙の意味ともなる。破産する前には松山からの玉章が澤山來た事は當然。文枕も感慨無量。

東魚 左り前になつては、思ふ様にも逢はれぬ悲しさ、文枕のわび寢も哀れである。

塵山 檢久と松山の情事は、世間に喧傳されて、人の周く知るところである。

(298) お内義の手を見覺る縫落屋

省二 お内義が注文の書きつけを認めては、依頼するからである。

東魚 屢々注文をうける古い馴染に對する、親しみが句の上に和やかに感じられる。

塵山 現代ならば驚堂流の筆蹟である。

(299) 元船も尻から見れハきりくす

東魚 元船 相當の大船であらうが、艫の方から直とも見た趣は、きりくすを尻から見たやうな氣味がある云ふ、「奇妙圖景」式の見立であらう。

塵山 とききくすを尻から見たやうなのではなく、元船を尻の方から見れば、其の形が蠡蜥に似て居るのである。

省二 句面其儘で、尻からみればキリくす型だと云ふだけ。本船は先づ大船である。

(300) 捨子見付る起くの貝

省二 起々 は目覺めた折りの顔の意。今日では赤ン坊の起きた時おきくすと云ふ言葉を用ふるが、必ずしも幼児の場合にのみ限つた詞ではなかつた。捨子を見付けた時、おきくすの顔をしてゐたのではないか。

東魚 起ぬけに門口の戸をあけると、捨子が軒下に居たのであらう。起々は捨子ではなく、見付た家人の方と考へる。

塵山 起く顔は、起出た直後の顔のことである。

(301) 朝寢の夜着て御談義を聞

省二 朝談義きく氣で息子ぶつ座り、の句から道樂息子ではなきか。

東魚 親の御談義なら起きもしやうし、叩き起されもしやう。女房の意見を聞いてゐる場合ではあるまいか。「なぐさみに女房の意見聞いてみる」などの類。

塵山 半眠半覺で、女房の御談義を聞く方が面白からう。

(302) 稻綱しまへ八百もない額

省二 飯綱使が魔術をつかひ了つた後で、よくくみれば、俗つばい(百は安つばいと意)つまりらぬ額つきをしてゐる。

東魚 神がかりの様になつてゐた物妻さなどの影もなく、眞に間のぬけた顔付をしてゐる。

塵山 江戸時代には關東地方に、飯綱使といふものが有つたやうである。

(303) 關守に子の有面ラハなかりけり

省二 細工過ぎたる關守の顔 役目柄殿しい面構へで、威儀を整へて居る。到底子供などある様な、優しい目ざしなど見受けられぬ(でも「關守の内へ這入ればほんの貌」ではあらう)。

東魚 前説の如く全く愛情など知らぬ、やかましい顔をしてゐると云ふので、表現に諧謔味がある。

塵山 子の有る面とは、暗に侮蔑

の意を含むで居るのであらう。

(304) 階子賣うつた先から寺参り

省二 梯子は、そんなに賣り易いものではないのに、今日は都合よく直に賣れたので、此儘家に歸るのは勿體ない、お寺参でもしてといふところは、面白い素材な材料である。

東魚 京都の趣が想像される。

塵山 京都の階子賣は、一九の「道中膝栗毛」にもあるが、如何にも寺院の多い京都の匂らしい。

(305) 湯治のきかぬ仙臺の鼻

省二 特に仙臺と斷つてあるから仙臺侯に關聯があるのか。

東魚 仙臺のうく辯の鼻へかゝるのは天性だから、湯治でも治らぬとの諧謔丈けであらう。

塵山 仙臺侯には無關係で、前説正しいと思ふ。

(306) 熱柿喰ふ君か口元六かしき

省二 大きい熱柿を食べるのは一寸事ものだ。口端がいたく汚れもする。「君」の口元は見ものとならう。

東魚 シュクリクリムの出来はじめに娘など、あぐりとやつた口のはたへ、クリムがついて困つたりするのを、面白がつて喰はした覺えがある。一寸似た趣である。

塵山 此の「君」といふのは、遊女のことであらうらしい。

(307) 向ふ棧敷へ烏芋投込む

省二 枱から焼飯などを出す客種の席のある向ふ棧敷とは、舞臺正面の眞向ふ二階棧敷即ち大向ふの事。烏芋を投込まれる。澤山投込むで貰へたなら、好都合幸ひするであらう。

東魚 辨當の茶の中で、烏芋などは安くあつかはれる方だから、「投込む」ものに「烏芋」も肯かせられる。

塵山 烏芋を投込むで貰ふのでなく、他より惡戯に投込むのであると思ふ。

(308) 夏艸の名を煩ふてきく

省二 思ふと退屈であり、寂寞も感ずる。茂つて居る夏草の名など尋ねるのも、慰みとなる。

東魚 夏草の勢のよいのに、吾が身の病み衰へたのを對照した心持がうかゞはれる。

塵山 轉地療養などして、其土地に生へてゐる草の名を問ふの歌。

(309) 引立て見れハ平目も夜と晝

省二 鮮は右側が白色、左側が暗褐色であるのを、夜と晝と見立てたまで。

東魚 前説の如く、平目の背、腹の黑白を晝と云つたのに違ひない塵山 晝夜の見立ては、ちよつと面白い。

近作柳樽

路郎選

鏝かけす塗らずに競ふ美しさ 今 治文庫
 勘ですと語るは叩き上げた人 同
 迷ふなと云ふ甲乙の説違ふ 同
 敵一步進まば吾等 五歩往かん 同
 聞けばネクタイ^マあつた^{と云ふ}鼻緒 同
 荒鷲も 母の前では 子に返り 兵庫縣柳 秀
 手をとつた散歩は 五百點の頃 同
 此邊も征つて來ました世界地圖 同
 病窓を慰め顔に鳩歩み 同
 長女を喪ひて (三句)
 いつ見ても笑ふ寫眞とお骨箱 大 阪研 太
 ほんとうに 秋は淋しい一七日 同
 秋の風 ああ配給は 一人減り 同
 經木書き忍術使ひのやうにゐる 同
 満月と母の合掌繪の如く 芦 屋 公 子
 一寸出る 恰好で此の頃 出勤し 同
 お返しに休閑茄子で間に合はせ 同
 ナス、キウリ、續^てごみんな達者^ぞ 大 阪美奈子
 陸海空 五人を送り 母少さし 同
 今日豫定まだほころび^{が縫}こ^と 同
 訪れば聲なくかすかな 鳩時計 同
 脂粉とは勝抜く國のものでなし 和歌山宏 方
 初老などそんな言葉は 返上す 同
 働くは我家の家憲のみでなし 同
 うちの子が大將だ皆來てごらん 尼 崎美世子
 五八四十ならねばならぬ帳簿^が 同

勤め終へあくまで空の蒼い事 同
 空閑地 秋には秋のものが出來 滿 洲しけを 同
 子の工夫或日は親をうなづかせ 同
 姑娘も戦ふ國の汗を知り 同
 飛行機を作れの聲に呼應して 大 阪寒 草
 鮮かな 轉業振りを 認められ 同
 女事務として 社員^のすききらひ 同
 維新前の暮し 親父に尋ねて居 東 京 士 郎
 日本男兒の最後 見よとアツツ島 同
 雜草をわざと植える 待避壕 同
 震禍の鳥取を訪れて
 餘震などものはモンベ巻脚絆 鳥取縣悟 志
 起ち上る 街へそれ釘 それ軍手 同
 罹災民 郷土部隊にいたはられ 同
 飢渴烈しく彈業將に盡きんとす 比 島 要 兒
 パパイアの 幹を噛つて 退かず 同
 氣強さは 腰の自爆用 手榴彈 同
 舞姫の 惜しい事には 背が低し 大 阪 光 夫
 御言葉にすがるとさすが 老主人 同
 補助席の二つへ子供 よく眠り 同
 獨りほちちにする 氣かよ屋守通^り 濠 北 頑 童
 ゆくと言ふ色白^き 印度ネシアの兒 同
 馬來語で 見よ東海の 勇ましき 同
 ラシニアワ^ー それも都會に住^む誇 横 濱しとし 同
 先生となぐり園兒のさようなら 同
 増産へたゞ増産へ 轉業し 大 阪 詩 朗
 債券を 夜業手當で 買ふ氣なり 同
 次々にこころ 出來る 子澤山 奈良縣翠 峯
 根負けをしたは 二夕親のみなら 同
 小包をとけば袂は 断つてゐた 貝 塚 蓑 笠
 垢の手を強く握つて 征きました 同
 昭南で 死にたからうに 秋の風 大 阪 葉 光
 小説より奇なりム氏を救^ひ出し 同
 秋の水 秋の姿の 美しさ 大 阪 曄 子
 父に名はないが 四人の 男の子 同
 袖切つて久しく戀の名に觸れず 大 阪 ひさみ
 秋だ秋 辨當ガラの 音もよし 同
 足の裏 見せて讀んでる 女事務 兵庫縣花 子
 琴爪へ 久しい指を 見つめてゐる 同
 女車掌 もう恥しい 顔でなし 下 關 水 月
 親も娘も 袂を切つた 夜を笑ひ 同
 式舉げて 十日足音も もうわかり 釧 路 孤 浪
 ノータイは たくましまし^{き毛もよしと見} 同
 戦果聞く 白き姿が せつなくて 滿 洲 青 穆
 雨後の草 汚れた兵の 足にゆれ 同
 悪口は つきず電髪 ふるはして 大 阪 梨 里
 少女もう 世間話へ 口を出し 同
 出稼を儲けるものときめており 貝 塚 陽 人
 港 内 廻 覽 板も 竿の 先 同
 死亡廣告 四男五男の 子澤山 朝 鮮 林 業 子
 イタリー無條件降伏
 玉碎と言ふ字ないらし 降伏し 同
 お太鼓で 今日 天使で ない娘 貝 塚 千 舟
 魂は 消えずアツツの 雲にのる 同
 かゝる世の 稻穂だ風も 心せよ 大 阪 照 二
 更生の 服を 囲んで 女事務 同
 捧ぐる子 無きさみしさを 献金し 尼 崎 利 一
 七十の 一等卒だと 父連者 同
 晩鐘の様に 百姓 落日を 拜み 貝 塚 庸 司
 ヒマ 實る下で 童話を 讀んでやる 同
 唸つてるベルトが こひし 恢復期 貝 塚 久 雄

永田青嵐氏近



語源覺書 (十一)

淺田 一

たものだと新村博士は説く。ブリキは青白い光といふ原意のドイツ古語から来て居り、蘭語ブリツクを経て日本に渡つた。

此外の金屬の名は凡て支那や南蠻からコトバと共に舶來したものである。日本にあつても其名を知らずゐたのであつた。

金、カネ、堅鍊の義とか堅土(カタニ)とか赫土(カニ)とか説かれてゐるが何れも感服出来ぬ。野崎茂太郎先生や賀茂百樹翁は之を打つ時の音カンから來たと説かれるのは合理的でその支那音キン、コン、チン亦然りである。賀茂氏はネは音とし、野崎先生は我古代に撥音ンがなかつたのでカネとなつたに過ぎぬとされる。後者に賛成したい。用言となつてはカナとなりカナケ、カナモノ、カナグ(具)などと熟する。金の種類はコガネ、アカガネ、シロカネ、クロガネなどと色でわけてゐる。スマ錫は鈴と同様擬聲語であると思ふが、清淨の意の古語スマにもかけてあるらしい。鉛はナマリカネの略で生(ナマ)で自由に曲げられるからかく名付けたものといふ。トタンは鑪の音がベルシヤを経てポルトガル語となつたトウタナガより日本に入つ

たものだと新村博士は説く。ブリキは青白い光といふ原意のドイツ古語から来て居り、蘭語ブリツクを経て日本に渡つた。此外の金屬の名は凡て支那や南蠻からコトバと共に舶來したものである。日本にあつても其名を知らずゐたのであつた。鑄サビは鋤、鋸、劍などいつた我古語サヒから來たともいひ、單に古いとサビがつくといふ意味のサビだともいふ。古語サヒは朝鮮語 *sa-pi* (鋸(モリ)) から來たと中島利一郎氏は説く。オツクスフオードデクシヨナリーで *Sature* (サーベル) の所をひくと東洋に起源するらしいとしてあるから、之も同源らしい。鈍ナタは朝鮮語の刀 *na-ta* から來たもので刀カタナは同じく *Kyō-nat* (*kotta-nat*) (片刃) から來たものであると中島氏は説く。像(カタ)を彫む刀(ナ)と説くよりも優れてゐる。雑グは此ナを活用させたものである。斧ヲノのノはナ(刀)の轉で小刀の意である。テヲナといふこともあるが手小刀である。マサカリは中島氏によると

オロツコ語のマシカリ、アイヌ語のマキリ、朝鮮語カルと同系といふ。ヨキは横切でタツキ縦切に對すると新井白石の解説がある。

○ 松山 前田 五健

露草よおまへも虫にきゝ入るか 悟りとはこんな手近にある笑ひ 番附を前に偽刀よく光り 松山の秋と相成り天守閣 しんみりと話近松ものをひき 圓描いて夜をありがとう殘置燈 あつさり茶掛の文字にある 餘裕 たしなみの鏡いくさの中乍ら 國の子だよい子だホロリ子守唄 放送の笛ふるさと秋祭

太刀は斷チから來たといふ説が多いが、中島氏は刀子の支那音 *tao-tse* に關係がある様にいふ。さうかも知れぬ。ホコは秀木(ホコ)とか穂木(ホコ)とかと説かれるが中島氏のいふ様に樺又は鋒の支那音 *Paag* の國語化したものと思はれる。

ツルギは「貫き切る」であると説かれる。刈ルは朝鮮語 *paeg* (刀) から來て居り、切ルも其轉呼らしいと松岡靜雄氏は云ふ。錐キリも切ルと同系であるといふ。斷ツは松岡氏に依ると切ルの意のフイジ語タタ、ピサヤ語タター、タガログ語タタク、チャモロ語ツツ、アイヌ語タタと同系だといふ。之は我國語叩クとも同系であらう。切ひは「叩き合ふ」とも「切り合ふ」とも取れる。

矢は枝の派生語と松岡氏はいふ、矢を放つ時の聲と賀茂氏にいふ。鑢ヤスリは矢スリであらう。射ルは矢を活用したコトバである。ヤリも矢を活用し矢の如く送り出す意味だといふ。之が遺ルであり、槍であると説かれてゐる。弓は射、矢から分化派生したコトバで射身だと松岡氏は説き曲(ユガ)ミと野崎先生は説かれる。堅ノミ、鋸ノコギリのノはナ(刀)の轉でノミは呑み込ませる意味も含まれてゐると賀藤氏は説く。鋸はノギギリともいふから新井白石はノ(刀)ハ(齒)ギリと説く。鋸は横に切ることが多いからノ(幅)コ(木)ギリだと野

崎藤太郎先生は説かれる。キコリは木切りの轉であらう。ハサミはハサムの體言化したものである。以上で金屬及金屬性兵器の古來傳はるものは略々述べたと思ふ。

土ツチは土地の支那音、アイヌのトイ又はトイトイと同系であらう。土をヒヂともいふのは濡れることをヒタ／＼ピチャ／＼、ビシヨ／＼などといふのと同源で泥沼をあるく時の音から來てゐると賀藤氏は説く。松岡氏等はヒ(水)ヂ(土)と説くが水でなく水をヒと訓ずるのは附に落ちぬ。賀藤氏説を取りたい。洪牙利で *Foid* といふのは偶合であらう。スカンデナヴィアでは皆 *Jord* (ヨルド) と云ひ、獨でエルデ、英でアースとなつて *d*、*th* で終り、羅典語テラからイタリヤのテラ、佛のテルなどは *t* に始まり *d*、*t* に縁の深いのも洋の東西の偶然の一致である。之も土塊を打つた時の音に基因してゐるからかも知れぬ。尙古いコトバに土をナとかニとか云つた。青丹よしなどのニや地震をナキフルといふ時のナキなどのナが之である。

滿洲固有語、ツングス、女真など土をナといふさうだし、朝鮮ではナラといふ所を見ると、ナも大陸から来たコトバらしい。然しツチ、ヒヂなどの勢に壓倒され地名などには残つてゐるが一般用語からは影を潜めた。

若き日の歌を

たづねて

高尾 亮 雄

去年晩秋の頃、伊賀の上野で行はれた蕉翁の俳聖殿の落慶式にお参りした。その翌日大阪府下の最奥地といはれる豊能郡舊根の莊村へ、實に私としては四十餘年ぶりの訪れ。伊賀國から大和、河内、攝津と一夜へだて、渡り鳥のやうに來たわけである。

勿論、その昔は箕有(阪急の舊名)電車も能勢電もない池田の町から稻川の清流にそつて溪谷せまる三里餘りをテクルより交通機關がなかつた。それが今は乗合バスも通うてゐる。その終點の西能勢といふのが私の目ざす根根神社のある部落、寶塚線能勢口驛で待合せ、同行してくれる筈の藤田視學の姿が見えない止むなくわびしい獨り旅、秋

のさびしさがいとゞ身に沁む溪間の紅葉のみが色はえて美しい。何故、私はこんな山村避地へ足をむけるに至つたか、丁度この歳の春だつたか、この能勢の部落から女子青年團の代表として一人の女先生が、私のゐる生駒山の道場の錬成會へ参加して來られた。實は私、昔々、あなたのまだ生れぬ前、その村の小學校に臨時代用教員として奉職してゐたことがあります。そこのお宮さんに、奉納の古い／＼和歌の額がありませんかと問うてみた。すると女先生は何かそれらしいものがあるやうにも思ひますとの答へ。たしかにその奉納額には天人地の中に入選した私の和歌がのつてる筈、どんな和歌だつたか、今はもう忘れてしまつてゐるが、とうから一度見たくて堪らない、ありし日の青春時代の思ひ出で、追憶の情にひかれてゐたもの、漸く今その念願が果されそうながたのだ。

幸ひ、西能勢の校長さんの案内をうけ眞先に根根神社へ参詣すると、五十幾年の昔ながらの神さびたおやしろ、あゝ、時々夢にまでみた古き歌額はありますが、お宮の拜殿、繪馬堂の内外、注意ぶかく隅なく探したが、どうしても見つからない、幾たびかの春秋、多くの星霜を重ねたこと故、もう朽ちはてしまつたのかわりにあつたにしようところが見る影もない、恐らく文字も判明しないであらふ。それにしても、この私のみがまだ生き永らへてゐるのが寧ろ不思議なくらい。ふと思ひ出す、その當時の校長庄野氏はどうされたか、遠い徳島の國へ家族をのこしをき、この村の禪寺に獨り暮しをして居られたのだつたが。

再び學校に引き返して、それとなく昔語りをすると、校長さんから、その時の和歌の選者は誰でしたかと問はれても、往事茫としてたしかな記憶がない。では多分當時のお宮の神主、植松先生にちがひありませんまい、それにつき好いものを御目につけて、校長さん自ら書棚から取り出されたのは立派な一冊の和本「古事記頒歌集」と題したものである。

本居宣長翁の高弟なる有信氏の曾孫に當るが、やはり家柄すこぶる和歌の道にも秀でてをられた。その昔、鈴の屋大人が三十有餘年間、心根をつくし畢生の大業としてわが國學の基礎を作られたあの「古事記傳」が漸く完成出版された砌、その祝意をこめて同學の門人たちから、一人一首づつ、その書に現はれた精神や代代の御門や、勇武な文夫、貴人たちを主題とした三十一文字を募集され、多くの名歌が集つたが、それが何かの事情で書物として世に公にされず、惜しいかな、そのまま久しく埋れ木となつてゐたのを、何とかしてこれを上梓世に示したいと、後學の人人が發起念願したもの、肝心の稿本がいつの事にか散逸、本居家にも見當らない、折角の發願も一時挫折のまゝになつてゐるところ、今から十數年前、偶然、この山奥の前記植松神主の手に大祖父から傳はり／＼、いと大切に保存されてゐることが判明したのであつた。

これこそ、まことに貴重な記念文献、是非とも前人の功績を貽さんものをと、この根之莊の有志たちが新に發起

一村の名譽にかけて、この山中の一寒村で出版しやうとなり、さてこそ本になつたのが即ちこれですと、校長さんはいと誇り顔になは語りつゞけられるところによると、その印刷がやはりこの村にある唯一つの貧弱な活版屋ながら主人が奮起し凝りも凝つたり全部四號の活字を購入、紙質も特別撰定、自ら手摺り器械にかけて一枚／＼入念に刷りあげ、世にも見事な出來榮へ、装幀もこの郡内の畫家の意匠圖案になるもの、出版に關する費用一切を寄附したのはやはり同郡の松尾源良といふ篤

ルジバルア

化體症

中耳炎
扁桃腺炎
敗血症

北支征破回顧

加川 泉 泡

(其六)

山西井娘環子關と云へば石炭で有名、無盡蔵にある石炭の山が果てしなく續いて居る。古來どんな英雄と雖も一度も破つたことのないと云ふ山西の省境、深さ七、八里敵は天險を利用して戦々たる山又山、峰又峰に岩石を剣抜いた洞窟陣地を構築して幾千もの正規兵で死守して居た。尙正太線に依つて太原城からドシ／＼新手の有力な兵を増加して一步も日軍を入れてなるものかと頭張つて居る。此の陣地は××國の指導を得て十年計畫で構築したものと聞く。

××日當地方獨特の晴天に恵まれて居た。×時荒鷲銀翼を旭に輝かせて編隊鮮やかに巨弾を抱いて高地の眞上の敵陣めがけて猛爆、地の底までつき通せとばかりの地雷、モウ／＼と立昇る黒煙……確實なる命中、然し黒煙が消えてゆくに依然として洞窟は、そのまゝの姿である。待機する私達の頭上をヒューンヒューンと友軍砲兵隊の集中射撃開始、敵陣はまるで仕掛け花火のやうだ。續いて私達は山腹に向つて進撃、彼等の銃砲聲が益々熾烈となつて来る。平地戦であれば一も二もなく敗走する敵兵も断崖絶壁で前進しなれないのを幸ひにしてなかなか退却しない。必死の防戦、手榴弾や石塊を無茶苦茶になげつけたりする中を昇つては

すべり、すべつては昇りつゝ食ひ下つてゆく攻撃には死も生も念頭になく唯、おのれ今にのみよとみんなどの腫は血走つて敵陣をグツツにらみつけながら中腹まで迫りつゝいた。眞紅な太陽がいつの間にか沈んであたりは淡暗く黄昏れて宵の月が山あひにまるく顔をだして居た。私達はこのまゝの態勢で夜明けまで露營、頂上の敵兵も夜の更けてゆくにつれて静まつて彼等の銃聲がやうやく沈黙したが、照明弾が青白く静かに敵陣地の上を舞つて居る。峰から吹き降して来る風はキツ／＼と身に沁みる。そして腹の皮がビリ／＼痙攣する程の空腹に襲はれてゐながらも雑糞の中に在る一袋のカンパンを握締めるだけで明日を思へばあきらまで耐え忍んでゆかなければならぬ。水筒の水は底の方でピチャピチャと音をたて一寸心細い。あたりの草の葉末に結ぶ露までなめたい位だった。中天には皓々たる十六夜の月が兵士の鐵兜を青白く照して居た。「いゝ月だネオイみんなあの月をみよ、お前達の親兄弟そして妻や子はやはりこの美しい月を吾々のやうに眺めて思ひを戦地に馳せ我々の武運長久を祈つて居つて下さるのだ」人情隊長松岡准尉の低い然し力強い聲だ。兵士たちは新戦場の月を仰いだ、一語も發する者もない。

「ヨシみんな目をつむつて内地の父母、兄弟、妻や子をしてなつかしい故郷の山河を想ひうかべてみよ」全員頭を垂れ身も心もなつかしい故郷に想ひを馳せて軍人としての新たなる覚悟を誓つた。みんなの頬にキラ／＼光る露がポトリポトリと落ちて岩石にしみてゆく。「みんな目をあけて、いゝか當面の一〇六〇高地攻撃は軍人として願つてもない機会が訪れたと云ふものだ。明日はみんなにあづかつて居る命をこの松岡の命と共に上御一人に捧げ奉り肉弾を以て奪取するのだ」「隊長殿ッ大いにやります。チャンコロをついて突いて突きまくつてやります」吉村一等兵の聲、「吉村傷は痛くないか」「ハツ大丈夫です。隊長殿、明日を思うと實に愉快です。これ位でヘコタレません」

今日攻撃途上元氣一杯の吉村一等兵は右肩を銃弾でやられて居るがそれも本人は氣付かずグングン進撃してこの位置に来て「おい吉村肩をやられて居るではないか」肩にじんで居る血をみた戰友に注意され始めて知つたと云ふ張切り兵士である。

黙々のうちに隊長から差出された水筒の水盃が取交はされた。「全員東を向て起てノ皇居遙拜」敵前百米にひかえて莊嚴なる最敬礼。男ならではの軍人ならではの味ふことの出来ない境地、感きわまりてかすかにすゝりなく聲があちこちに聞える。××日、やうやく東は白みかけるころ、松岡〇隊長は敵の猛射をもとせず、眞向うからグングン頂上の敵陣地に肉迫、隊長は常に先頭にたつて進んで行く。兵士も隊長におかれてなるものかと猛攻して行つた。敵の側方機關銃の掃射、一歩登れば一兵倒れると云ふ決死的なものだった。

「突撃だッ」隊長の聲はかすれて居た。「あッウウム糞ッ」「隊長殿どうしました」「右脚に敵弾命中。俺にかまうな突撃だッ突撃だッ」軍刀を杖に立ち上つてはころびつゝ、二歩三歩前進「アツ」こんどの一弾は隊長の咽喉に命中、元氣一杯の隊長は其場にバツタリ倒れたが再び指揮せんとして起き直つた。けれど鮮血軍服を染めて座つてしまつた。隊長は雜糞から白紙拾枚餘り無難作に取りだしてキチンと前に置いて東に向つて最敬礼。急いで右手を咽喉に持つてゆき指先にほとばしる血をベツトリとつけて白紙に「天」の一字を書いて丁寧に横におき次に「皇」と書いた。だんだん氣力は衰えて

ゆく、然し乍ら白紙六枚に「天皇陛下萬歳」の六文字を大書して其場に倒れたのである。隊長やられたとみるや木下曹長×隊代理となつて天も裂けよとばかりの喊聲をあげて突入して行つた。私たちは右往左往する敵を「隊長の仇思ひ知れ」とばかりついてつきまくつてやつた。算を亂して退却する敵に猛射を浴せつゝ高地の一角を完全に占領した。此機逸せずと正面の××隊右翼××隊の總攻撃だ怒譟の如き突撃……一番乗の勇士に依つて一〇六〇高地に日の丸が高くはためくと×隊全員隊長の下にかけよつて合掌、泪ながら萬歳の絶叫、占領の報告、死を以て大書した「天皇陛下萬歳」の鮮血六文字にうやうやしく頭を下げる兵士の腫に萬里の長城は潤んで居た



めいた

片瀬醫學博士述
冊子呈上

妊娠としての大切な責任はカルシウムを補給して諸病を防ぎ、子宮の收縮を容易ならしめ「安産」へ導くことにあります。

推奨
監査
片瀬醫學博士



ワダカルシウム錠

大阪道修町 和田卯助商店

大原から鞍馬へ

— 香・水・潮・紫 —

(一)

よく晴れ切つた秋の朝、もぐらの様に新大阪線四條大宮の地下から浮び出て来た香林、水客、潮花、紫香の四人、市電を待つ間に公衆電話に飛込んだ香林さん

「一寸商用で電話しましな」旅に出ても仲々抜け目のない所を見せる。

出町柳から観山電車で八瀬へ、其處からズラリと並んでいつ出るともわからぬバスを尻目に歩きはじめる。リユツクサツク唯一人持參の水客さんへ

「何も持ちついでやから、人足を頼むぜ」

みんなが辨當をつめこむやら、上衣迄押し込んで水客さんに持たせる。

「運賃は十五錢として一時間毎に倍增やせ」

と麻雀の點數の様な値をつけて水客さん、すこぶる朗かである。

大きくうねつてゐる大原街道は心持ち坂道となつて伸びてゐる。

真下に流れる溪流はサラ／＼音がして澄切つた水の色は比叡の山影を寫して綺麗だ。奥から來たらしい村の女子青年勤勞奉仕隊の一群とすれ違ふ。

八瀬村も過ぎ大きく突出た山裾を曲ると大原らしい息吹を感じる。バスは何處迄行くのかと、附近の人に尋ねると途中までで

「と云ふ、ちや大原が終點でないですね」と聞くのと「え、終點は途中です」と答へると。何だか分けが判らなくなつてよく聞くと大原の向ふに途中と云ふ部落があるとの事で、萬才の様な質問を終つた。

羽の色が美しい模様の這入つた蜻蛉が足許をくぐり抜ける。決して高くは飛ばない蜻蛉である。早速大原蜻蛉と名付ける。

大原女と行き合ふ靴に赤とんぼ水客

大原に、も少しと云ふ所でバスに追ひ抜かれそうになる。折角一里餘り歩いて來て今更抜かれるのも残念と小走りになつて大原の宿へ流れこむ。

バス待合所の横を斜にダラ／＼坂を登りつめると小さな橋がある。越えるのと三千院だ。寂光院へ氣がせかれてゐるので、御鳥羽、順徳兩帝陵を參拜して勝林院を経て今度は坂道を下る。静かな中に水車のきしる音を詩的に感じる。

大原女に道問ふ坂の柿青し

坂を下つて川を渡るともう直ぐ寂光院だ。大原蜻蛉が無數に亂れ飛ぶ。寂光院に着くや否や茶店に飛込んで兎も角腹ごしらへだ。

紫葉漬を抱へて妻のことに觸れ

香林

茶店を出て寂光院拜觀と出かける。錆び切つた寺の境内はじつと



募集句

一路集

月當番 白面人選

配給へ月當番は残りくじもう順が來たかと云つてる月當番
特配へ月當番はねぎらはれ
月當番かつては寢坊たりし家
月當番濟ませ引越の別れする
月當番十四時になり飯にする
臨月は月當番を遠慮させ
月當番母そろばんに馴れて來る
月當番無口な父も引き出され
月當番秤湯吞が引繼がれ
月當番やよつてと母を借りにくる
月當番して人物を見直され
お隣りの不幸に會つた月當番
新世帶訪へば月當番の札
月當番今日は聞き合はせに來られ
月當番見學へお供命ぜられ
世話好きの月當番を軽く受け
演出は月當番の紙芝居
月當番變人さんも街に馴れ
感謝してされて當番引繼がれ
月當番一人暮しはちと困り
月當番戦地へ知らすことが出來
月當番なれる時分はもう終り

彌生 月當番一錢足して割切れる
祥月 月當番の札を貰つたお朔日
葉光 月當番産婆も呼びに行つてくれ
朝美 慰問品月當番の趣味も入れ
同 月當番魚の名前をきゝ忘れ
乙平 月當番してから愚痴を云はぬなり
同 月當番壺算をして笑はれる
風柳 月當番うるさ型とは思へども
惠美須 喧嘩した子の正しさを聞いてやり
三丸 南方の地理を子供に教へられ
晶平 兩手にも背にも子供の脈が打ち
同 背の子に握手してから靴をはき
詩朗 飛行機の智識子供に仕込まれる
美奈子 子供等が教へてくれた探物
好郎 夕燒のする頃子供歸つて來
照二 ニュース映畫拍手は子供の席あたり
武士 奉仕隊子供と見へぬ力なり
同 枕元積木の汽車にいゝ寢息
伊太古 スクラムを組んで子供奉仕隊
伊太古 叱られた事を子供はもう忘れ
葛藤 考
美世子 祥月
平次 醉堂

子供 紫香選

福平 月當番他所の世帯にそつとふれ
同 月當番變屈さんも改まり
よしを 月當番の札は病家を通り越し
青芒 月當番子供も出来る役があり
同 月當番の家一番に國旗出し
正起 お隣へ月當番としての聲
一馬 門がまへ當番札を小さくかけ
寒井 月當番一錢足して割切れる
研太 月當番の札を貰つたお朔日
立緒 月當番産婆も呼びに行つてくれ
昌男 慰問品月當番の趣味も入れ
翠柳 月當番魚の名前をきゝ忘れ
蕤笠 月當番してから愚痴を云はぬなり
梅里 月當番壺算をして笑はれる
梨里 月當番うるさ型とは思へども
同

柳界展望

係・銃 人

▼本社主催 米英擊滅句會は十月二日午後六時半御津八幡宮にて開催
 ▼川・雜布施支部句會は十三日六時半城東商業學校にて、松坂藝能講習所川柳講座は三日、十七日午後二時▼大阪警察病院川柳會は十九日午後五時▼大阪通信病院川柳會は十五日午後五時▼川・雜花崗支部は十六日午後六時から安夢居に於て開催▼阪大川柳會は廿六日午後五時開催▼市電川柳會では十一月一日午前九時、四ッ橋市電地下室で白峰歡迎句會を開催、路郎主幹出席

消息

▼大島瀧明氏令息故裕史君の遺作集「冷き奢り」(非賣品)は故人を繞る人々にて編纂され故人の一周忌に纏組大連支部より發行された▼八木博坊氏(大阪)は八月下旬より健康すぐれず入院療養の由▼執行礎石氏(不朽洞會員)は社用にて一日東京へ出張三日歸阪された▼蛭子省二氏(客員)は秋冷と共に年來の宿病に苦しまれつゝも尙本誌の「武玉川研究」の執筆に努力をされて居られる由、感謝と共に御鞭轡を祈る▼故森本秋子氏の三周忌に追悼句會を森本花子氏宅に於て催された▼西田紳樂氏(不朽洞會員)は兵庫縣の委嘱にて播州但馬地方へ十三日から本月下旬にかけ講演された▼佐野三造氏(京都府)は十日歸京された、尙同氏令息は目下京大病院入院中の

由▼有恒川柳講座のため多年世話役として活躍された大澤聖一氏が離阪された▼港川柳作句道場では十七日創立一週年記念句會を開催された▼大森風來子氏(泰)から次のやうな便りを寄せられた▼此處では、支那語、マレー語、英語、印度語、泰語、オランダ語等種々の言葉が多く、日本の兵隊は多數の言葉を知り、尙手真似が一番上手である」と▼加川泉泡氏(不朽洞會員)は十三日から社用で九州方面へ出張十七日歸阪された▼關釜聯絡船の無線局長の櫻川不水氏(不朽洞會員)は眞備丸乗組でないといふ市多樓氏からの返信があつた尙不水氏令息徹君が廣島に就職され濱田久米雄氏(不朽洞會員)宅から通勤のこと▼弘津柳慶氏(朝鮮)は離九州▼福井哲氏(不朽洞會員)は國策に沿ひ大阪から京都府下へ疎開され一落人のなにか言はん芋昌」の句を寄せられた▼橋本練雨氏(不朽洞會員)は二十八日岐阜長良川畔に於ける決戦生活指導者講習會へ出席日歸阪された▼福田山雨樓氏(不朽洞會員)は公用で名古屋へ出張歸途甲府の篠原春雨翁を訪問談話された由、因に春雨翁は最近縣下の川柳家を糾合し「川柳常會」誌を刊行された由▼二十五日夕刻から長堀大市で、山中獨樂氏主催で麻生路郎主幹、高尾亮雄氏、建本重太郎氏の四人が歡談された▼宮尾しげを氏(東京)は「四國遍路」(書と文)を東京市日本橋區久松町一三鶴書房から出版された▼大阪川柳聯盟が十月二十三日午後六時から大寶寺町聯合會館三階で結成された。會員五十名▼翌廿四日夜委員會開催、事務所を大阪市東淀川區三津屋北通四ノ二九武部香林氏方

に置くこととなつた▼西尾葉氏(不朽洞會員)が二十六日に離阪された▼久保田多加史氏(大阪)は十月下旬から宿病のため目下靜養されてゐる▼丸尾潮花氏(不朽洞會員)は十一月下旬水戸へ榮轉、留守宅は前通り▼廿七日午後二時から河原田知事を會長とする大阪文化協力會結成式が協業會館六階で開催され、大阪川柳聯盟が参加團體として第一部(文藝)に加盟▼二十八日午後六時から辰己家で路郎主幹を圍んで柳談會が催され、大會するもの孤蓬、幽王、聖司、吐空、香林の諸氏と銃人

▼石川ひさみ氏(大阪)は六日華燭の宴を挙げられると同時に夫君の郷里山梨縣へ永住された▼榊田松羅氏(不朽洞會員)は二男潔君を繼けられた▼阿部佐保蘭氏(東京)母堂が拾月六日永眠された謹んで悼む▼中西彌生氏(奈良縣)は十月五日永眠された。謹悼

▼大島瀧明氏は大連市櫻町百二番地へ▼六角駒治郎氏は奈良縣生駒郡生駒本町區第一隣保班へ▼兒島青衿子は新京特別市敷島區曙町三丁目高田興業株式會社新京支店へ▼藤井淵氏は大阪市阿部野區昭和町東一丁目二五へ

★吉光晚甫氏は聖山
 ▼原島龍夫氏は立緒

★社のお覽板

★支部幹事の更迭
 川雜櫻島支部では幹事梅田秀溪氏が多忙のため唐津朝美氏と更迭することとなつた。

★不朽洞會員の岸田風柳氏は離阪のため不朽洞會を退會された。

★寒い時には、お互ひの肩と肩と押し合つても暖かをとれるし、自分の手の甲と手の甲とを摺合つても暖かをとれるものだ。今の日本人はその手の甲と手の甲を摺り合ふやうに、なんの蟻りもない親しさでガツチリ取つ組んで敵米英にあたらねばならない時だ。

★それに、まだそうならない人たちが可成りあるやうに見ゆける。一時も早く、そんな氣持を捨ててしまはねば、いぢまで捨てて皇國のために死闘してゐる皇軍にすまないと思ふ。

★今の私の心境は何んでも捨て得る覺悟が出来てゐる。行けと云はれば何處へでも行く覺悟が出来てゐる。しかし犬死だけはしたくない。

★本號發表の「作品二三」は曾ての「火の貝燈」のやうに回覽によつて句評を試みた。評者は東京の山雨樓氏、松山の五健氏、大阪の紳樂氏と小生の四人である。

★拙稿の「初等川柳講座」は例句の蒐集になか／＼骨が折れるので本號へ發表することが出来なかつた。例句をあつめてゐるうちに感じたことであるが、近來句の低下したことはあらそはれない。形式の點から觀ても變化に乏しい。いかに各人の生活があはたらしいかと云ふこともうかがはれる。もつとも他誌の非詩的な句にまで墮してゐるのに比すれば多少の自負は

廻轉椅子



持てる譯である。

★淺田一博士が闘病生活中にもつた「語源覺書」も氏の離床と共に一ト先づ打切ることとした。

★高尾亮雄氏の「若き日の歌をたづねて」は氏の若い頃の田舎教師時代が偲ばれる。斯うした畏友のために、スペースを割くことは私だきたい。

★「一路集」は前號に乗り遅れた白面人氏選句「月當番」を加へて三題發表した

★「大原から鞍馬へ」は句會部の紫香、香林、潮花、水客の四君が練成を兼ねた吟行時である。

★前號の遅刊を少しも取戻したと思つて、随分努力したが、おそらく二三日取戻せる程度ではないかと思つてゐる。まだか／＼と云ふ氣持がよくこちらには判つてゐるだけに、努力の限りにあつたことだけはお傳へしておきたい。(路郎生)

お買物は三越

定休日・毎月曜日
 營業時間 9時-5時

大坂 三越



投稿規程
用紙は原稿用紙、文字を正確
開欄日及題所記入
毎月廿五日
投稿者は本社宛

米英撃滅句會

十月二日 於御津八幡宮

量を頼んでわが防衛線に肉薄せんとする、敵米英の反攻は日毎苛烈をきはめてゐる。この際我々川柳人は更に熱奮、一句一彈、以つて米英撃滅の敵愾心を昂揚せんとして、本社では十月二日午後六時から米英撃滅句會を御津八幡宮に於て開催した。そして出席者は如何にも催しに相應しい各席題と取組んで一句必殺の政闘振りや發揮した。鮎美氏の前月句會作品の句評は時間を短縮する意味から前回と趣向を變へ、代表的優秀句を三句選んで、これを壇上に掲げ、原稿を手にして實に忠實な句評をされた。路郎主幹は「日本人」の演題の下に「日本人は段々笑ひを失ひつゝある」といふ某外人の言を引用し「笑ひをなくしたのは米英人の爲だ」と抗議して後、米英人の横暴「日本人の忍耐」遂にハワイ真珠灣頭に於ける日本人の一大反撃力となつた事を述べ、後段に入つては「藝術上からは外人は科學型であるが、日本人は詩人型で短促である。従つて藝術上、短詩川柳は日本人の姿でもある」と川柳のため大いに氣を吐き、終りに「神代より日月未だ地に落ちず」の古句を引用して、日本帝國の磐石性を説き、「日本人は必勝の信念を以て闘ひ抜くことである」と結んで降壇。

最後に兼題「戦術」の披露があつて盛會裡に散會した

出席者(順不同)

- 路郎・孤蓬・和雄・香林・柳笑・茂・武良里・鮎美・光洋・銃人・默平・葛藤・幽王・福平・安夢・邦太郎・詩郎・紫香好郎・順三・礎石・三葉・松緑・一鉢・正一・掬夫・よしを・夜王・泉泡・潮花不二・水客・豆秋・碧川・白柳子・梨里奈那

兼題「戦術」 路郎選

孔明の戦術にない體當り 寄與史
そうくればこうする術もあるんぞ 井魚
戦術は夫へ甘へてゐるばかり 柳笑
お手は何思案の腕へ蚊がとまり 不二
ケベツクに打つ手の切れた顔が寄り 緑葉
戦術のうまみマレーを逆に攻め 詩朗
戦術のとほりに敵がのつてくる よしを
拙い戦術折角の魚は逃げ 默平
三宅坂孫呉の兵書の上をゆく 掬夫
敵を知るだけに戦術堂に入り 松緑
戦術のその上に吹く神の風 水客
戦術も説いて歴史の講義する 孤蓬
ジャングルを抜ける戦術とは知ら 銃人
大西洋越へて戦術變へにゆき 同
趣味の話して保険屋も樂でなし 香林
武士道にゲリラ戦術などはなし 妄夢
砲聲に遠く戦史を讀みふけり 孤蓬

兼題「無條件」 紫香選

無條件ぽんとたゝいた良盆 三葉
子の願ひ母は何にも云はずき 碧川
無條件貰つた嫁の健康美 泉泡
無條件へらくくと良くもぶ 幽王
何もかも承知傷痍の人へ嫁き 黙平
若難の希望へ母も無條件 好郎
無條件勤めてる先聞びただけ 松緑

無條件男同士の手を握り 水客
白紙委任金のことにはふれず置く 同
三男は條件なしの南方行き 邦太郎
條件は無い管母も惚れて居り 同
背信の軍服がさびしい無條件 鮎美
無條件ぐらつく椅子で印を押し 同
無條件ですとはよくも惚れたもの 香林
無條件すらくくと用が済み 同
無條件もう結納のことも決め 同

兼題「先手」 豆秋選

南國の孤島へ先手の日章旗 よしを
荒鷲が先手をうつた戦果なり 詩朗
母親は先手を打つて出して呉れ 不二
先手先手空から神兵降りてくる 紫香
附貨の手頃の家は先手あり 掬夫
先手先手ムツソリーニはやせて居 泉泡
先手とりやおら煙草を吸ひつける 同
鮮かに先手決つた眞珠灣 松緑
結局は先手がものを言ひました 同
あつばれた先手は馬の口をとり 鮎美
鼻唄で先手の石をバチリく打ち 豆秋

兼題「捨身」 潮花選

横綱へ捨身ころりと投げ出され 不二
三機も捨身でおとす體當り 三葉
奉公袋買ふたその日に髪を入れ 孤蓬
基地は晴れ今日は捨身の髭を剃り 黙平
電話口 おんなの捨身感じたり 水客
トーチカへ捨身の効いた火が揚り 邦太郎
生産へ捨身の兄へつゞく僕 よしを
荒鷲の捨身火を吹く飛行帽 掬夫
悠久の大義に生きた捨身なり 松緑
もう一機捨身で落し自爆する 紫香
辭表を腹に代表立ち上り 柳笑
どうにでもなれと苦勞へ強く立ち 同
徴用工捨身になつたおそろしさ 鮎美
闘魂の燃ゆる捨身に海迫る 同
上陸艇捨身になつた潮をあび 潮花

兼題「白旗」 五選
白旗に昭南島の月が映へ 三葉
白旗へ命の惜しい顔ばかり 幽王
敵將の顔白旗が大きすぎ 鮎美
砲煙を抜けて白旗まつすぐ來 紫香
歴史の映畫に白い旗うつる 豆秋

川梅田支部句會 (大阪) 鮎美報

噂だけならば好いがと母案じ 弘
告げぐちへ噂だろとうと師の慈愛 茂
榮轉の噂へ残務いそがしき 靜波
内風呂で今日の噂を思ひ出し 喜弘
のほんと噂の人はひとり旅 鮎美
轉寝へ今日もかしまし 蠅の聲 美代子
轉寝の父の毛脛が少し瘦せ 武良里
うたゝねの枕が固い旅の宿 緑葉
うたゝねの女の鼻がちと動き 三司
うたゝねを起して歸る里の母 鮎美
誤解され貧乏にあまんぢる 一也

川下關支部句會 (下關) 秋無草報

九月十二日 於嘘川居 半休報
病院で計ると低い體溫器 秋無草
子の顔と體溫計と見比べる 久米雄
體溫計疑つて見る 高い熱 市多樓
體溫計素直に受ける子のやつれ 十字星
爆音を仰げば蜻蛉目をかすめ 九呂平
荳麻の出來蜻蛉何處のも見て廻り 吾郎
間に合せ器用な妻が羨やまれ 秋無草



聖天さんへつびり腰へ背を向け
若草の萌える力を見て歸り
押通す力の光る立志傳
人生の出たとこ勝負運と定め
運命を知つて手堅く小金貯め
難駕の母校にグライダー残る
一切を業ときめてる珠數の色
運命をのぞき込む氣で見合ひ也
ちよこなんと待つてらしい俺。運
運命です慰め合ふてみぢめすぎ
大空へ五拾錢がとこ聞いて見る
大空へ男双手をぐつとあげ
大空をにらむ瞳にある決意
模型機のこれ大空征く姿
大空の關守こんな若い顔
大空を護るが如く輪をやめず
大空へ或る日詩人はよむかける
還らざる一機に基地の空くらし
一機二機三機大空澄みわたり
監視哨 今日も大空 無事に明け
ソロモンへつづく大空夕焼す
神國の大空らしく今朝も晴れ
大空に爆音のありか子と探し
九月十九日

補給路がつけば腕前通り勝ち
我が腕を信ずる如く名醫坐し
腕前が違ひますよと歩で押え
待ち兼ねたこの日のための腕
勝負あつた見て居た方は呑み込
支關の聲は確に家主なり
ヤアヤアで支關上るこわい友
支關だけの壘をかへておき
支關に馬つながれてく
支關だけで歸る筈だつたのに
支關で早や胸騒ぎまだ若し
支關に來る客でなし粹な紋
見送つて來る支關でくかれる
支關に立ち靴下が氣に懸り
支關へ出す座蒲團は善理で出し
支關へ初段と云ふ飾り立て
支關でコート着てからまだ話し
支關で別れて手土産そつと置き
支關拂ひ主人は立つたままなり
暮し向き大支關の稍々寂し
支關の亂れも世帯じみて見せ
有恒川柳會 (大阪)

九月二十八日 於俱樂部小室 鋭々報
耳にせど社長やすくびきらず青美
耳打ちへ 満更でない顔となり 鋭々
耳よりな話椅子から立つて來る 同
變屈が耳打ちへ 聲出して訊き 同
密林で 勘の 働く山の兵 青美
妻の勘とられた後で詐欺と知り 同
請け判へ勘の働く執事なり 同

節約の中に育つた人となり 同
風呂の子が静になつて氣にかゝり 喜由
同窓をさげすむ外かや 草鞋錢 同
同窓會抱いた以外に二人あり 同
同窓に學者軍人漫才師 晴夫
もめごとを未だ風呂までも持て 榮實
同窓會自己紹介で 宣傳し 同
節約か割箸さへもつけて來ず 没食子
節約の結晶こゝに 献納機 同
同窓に負けじと空へつづくなり 同

徐州川柳會 (徐州)

安東川柳會 (安東)

九月廿四日 於文協事務所ひろし報
太陽をはづしてねらふ高射砲 五平
防疫陣蟻のほほんど飛び去りぬ 小女郎
風塵にボーイの居らぬ事務机 ひろし
散步する 姑娘風にさからはず 雨町
支那家屋風の抜け道考へる 小女郎

九月二十三日 於東鶏莊 勇祐報
靖國へ續く東亜の揺るぎ無く 勇祐
輝かしき武勳を秘めて靈かへる 昌男
燒香へ視線を浴びて 遺兒と母 悟朗
豊年の穂先を走る稻光 春雅子
燈臺の光旅愁を慰める 春草
榮光に佛間の寫眞笑ひそう 泰平樂
節穴に今日も天氣と言ふ光 春雅子

待たずに乗れる

阪神電車

大阪通信病院川柳會 (大阪)
九月十六日 没食子報
番臺は戰士の汗へ愛想よし 荷堂
同窓會職業別の賑やかさ 卓二
しまい風呂戦ひ抜いた顔ばかり 竹莊
同窓に保険勧誘される今 方正

神戶から大阪へ 大阪から神戶へ
燈が見えて 行軍の歌 元氣づき 泰平樂
十月六日 翠芳報
雷のやうに感じる叱りやう 朗舟
雷の恐かつたこと 先づ話し 翠芳
信號で二つに切れた交叉點 同
夕刊がほしい手がでる 交叉點 いづみ
監督もカスと云われる 交叉點 素人
交叉點やつとで越して 寺詣り 秀甫
歸還して 又なつかしき 交叉點 茶目坊
交叉點 青や青やと走つて居 山人
交叉點 決戦服の數が増え 白扇
退避壕 交叉點までのびてゐる 水月
交叉點 口笛で行く程に馴れ 美奈子
警官の一人が目立つ 交叉點 輝翠
混雑にスリを逃がした 交叉點 綠雨
交叉點 赤で通つた救急車 青雲
英靈へ 犬も止つた 交叉點 同
石鹼を見つめて 秋の旅にゐる 白峯
シヤボンの泡にひとり子よく遊び 美奈子
石鹼の泡をかぶつて 挨拶し 青雲
貸さぬとは知らず 空家の間取りを見 白扇
過ぎたれど子に引かされた 空家を借 白雲
温泉の 此處にも 空家一つあり 輝翠
防空の事務所に 空家當てられる 輝翠
古臭い空家で 今日も見せた だけ 輝翠
秋なすび 空屋の裏を 淋しうし 輝翠

うたがりあ！んさ隊兵

決戦下の

師走川柳大會

—大東亞戦争三周年記念—

兼題

「戦果」(三句)
橋本 緑雨選

「赤十字」(三句)
市場 没食子選

「軍屬」(三句)
河野 夜王選

「日の丸」(三句)
正本 水客選

★締切十二月二日着
(本社大會係宛)

★投句用紙各型別紙・ハガキ又は同型紙に限る

席題 四題 當夜發表
高橋かほる・寺井鏡々・清水白柳子・黒川紫香

講演 「一句に風格を示せ」
主幹 麻生 路郎

「大東亞の言葉」
戸田 孤篷

當選天句・漫書揮毫
種 瓜平氏

對抗句戦(順不同)
梅田支部 鐵道病院支部
櫻島支部 大鐵局支部
城南支部 市電川柳會
光笑會 豊中支部

司會者 土産 光洋
(電話南八六四〇番)

國民儀禮
挨拶
川柳雜誌社不
朽洞會委員長 戸倉 普天

日 時 十二月四日(土)
午後自五時半至九時
(時間厳守)
會場 南區八幡町佐野屋橋
筋角(木橋橋電停東二丁)
御津八幡宮

堺支部 尼崎支部
神津支部 道頓堀支部
松坂俱樂部 有恒俱樂部
阪大川柳會 花園支部
警察病院川柳會 住吉支部
大阪遞信病院川柳會
西宮支部 布施支部
番組當夜發表・別に參會者對
抗句戦を行ふ
會費 壹圓也

★投句のみの方は兼題と共に小爲替五拾錢又は二錢切手廿五枚を同封のこと
賞品
▼天地人五客(各題)に贈呈
▼對抗句戦の賞品は優勝者準優勝者に路郎主幹の揮毫作品を贈呈
▼出席者全部に路郎主幹外數氏の短冊一葉宛呈上。

幹事
万よし、鮎美、三司、茂、水客、柳太、万的、白柳子、小松園、大研子、里十九、紫香、春興、朝美、惠美須、綠雨、翠芳、白峯、角美、波夢造、美知夫、寄與史、香林、乙平、不二、嶺泉、安夢、木阿彌、詩朗、白面人、泉泡、松緑、三葉、礎石、光洋、聖司、没食子、竹莊、鏡々、孤篷、帆船、利生、銃人、幽王、玲之介、青柳、豆秋、夜王、是牛、丹路、普天、(順不同)
大阪市西區江戸堀上通二ノ四六(昭和ビル)

主催 川柳雜誌社
電話土佐堀公益・公益番
▼當日警戒警報が発令され
ない場合は日定を變更しな
らぬ
▼下足のための風呂敷又は
古新聞を用意されたい。

戦線への慰問に

麻生路郎著

新川柳評釋

定價〇・八〇

本筋の川柳で一詩選りの名句を蒐め、その一句一句に、不即不離の評釋がしてある。

藤村誠一著・序文 麻生路郎・自由宗治

詩人複眼

定價一・〇〇

川柳眼で書かれた詩人複眼。その大半は高野聖徳のペンネームで川柳雜誌に發表されたもの。

戸倉普天著・麻生路郎序

普天隨筆

(非賣品)

川柳人の隨筆の面白さは又別である。この場合の面白さは滑稽といふ意味ではない。辛辣に近や愚問の記さの謂である。著者は日東紡産業の専務。(戦時三週刊西二十五巻で購つ)

戸田孤篷著・麻生路郎序

柳川二千六百年史

定價〇・九〇

著者一人の創作 詠史川柳の半端をゆく。
街の難音(實切) 大空(實切) 人の一代(實切)
累卵の遊び(實切)

所行發

不 朽 洞

大阪市住吉區万代西五ノ二五
振替大阪三〇三九二番

